顔見知りが増えれば頼り頼られる関係もつくりやすいから。

週末の公園で開催した「まちのおやこテーブル」。まちのあちこちでこうした場を設け、ひとの出会いが広がるよう願って。

まちのカフェの営業終了後、スペースを貸しきり、地域の若手の先生を呼んで「はじめての哲学カフェ」を開催。「涙」をテーマに子どもと大人の対話を試みました。大人は興味津々ながら、この日の子どもたちはあそびに流れ、哲学の時間は少しで終了。

なぜ平日の夕食なのかといえば、その時間がいちばん「孤育て」するひとにはつらいところだから。

「仕事から疲れて帰って、あたふた夕食、そして入浴、就寝と、休む間もないこの時間、一日でいちばんキーッとなるところです。だからあえてその時間、ほかのひとと一緒に過ごすと、おしゃべりで気が抜けたり、子どももたのしい時間をもてたり。そのうえまちに知り合いも増えれば、少しずつ育児がラクになりますから」（ヨーコさん）

実際、参加したひとたちからは「仕事後、食事をつくらずごはんを食べられることのしあわせ&ひとがいるっていう安心感のある空間がいい」という感想も。

そんな場で、キッズスペースを見守るのが深津さんです。

「ただの託児ではなく、子どものサイズに合わせた道具や発達に沿ったおもちゃを用意し、子どもたちが『自分でできた！』を経験できるように準備します。その姿を見たおかあさんたちが、『うちの子、こんなことできるんだ！』と驚いていることも」（深津さん）

「まちのおやこテーブル」の活動では、かならずキッズスペースを用意し、偶然参加した地域のひとにも、子どもには自分でできる力があること、子どもも立派な市民であることを伝えようとしています。

「食事の席でも、子どもたちに積極的に手伝ってもらったり、ときには調理に取り組むことも。わたし自身もここでのやり方に触れたことで、子どもとの関わり方が変わりました」（小林さん）

子どもの調理には、プロの小笠原光子さんの段取りが光ります。

「光子さんは、調理イベントの前になると、2歳の子ににんじんを切らせて大丈夫かとか、粉は扱えるのかなど、熱心にわたしに聞いて、レシピ、段取り、道具をそろえるなどしてくれます。接客のプロの目線で、わたしとは気づきの範囲が違うんですよね」（深津さん）

こうしてまちを見渡すと、いろいろな才能をもつひとが一緒に暮らしていることに気づかされます。

「大人が息抜きしたり、学ぶ時間をもつことで、母・父でも会社員でもない『わたし』に戻る時間を過ごす意味は大きいと思う。『わたし』が満たされることで、子どもにやさしくなれますから」（ヨーコさん）

「まちのおやこテーブル」は、スタートから2年半。参加者は延べ550人。公園主催イベントに出店したり、地域のイベントでキッズスペースを担当するなど、ほかの団体ともつながりをもちはじめています。

「大人も子どもも一緒にいられる場づくりを、町の中に広げたい。町のみんなが子どもに関心をもって『まちのおや』になってくれたら、子育てがラクになるだけでなく、子どもたちにも居やすいまちになるんじゃないかな」（深津さん）

まち全体が、子どもにやさしい。そんな地域づくりが、「まちのおやこテーブル」の目標です。

「案外子どものほうが、仲間や大人に対してやさしかったりするんですけれどね」（小坂さん）

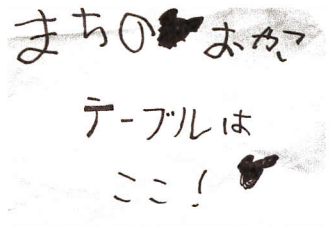
きっと国分寺は、いまよりもっと子育てしやすいまちになる。そう確信させてくれる活動です。

「わたし」に戻る時間が必要。「わたし」が満たされると子どもにもやさしくなれるから。

国分寺の野菜を調理する会を実施したときのようす。子どもたちが「自分で」粉を量ったり野菜を切ったり。（写真提供・まちのおやこテーブル）

子どもの発達について学ぶ会。講師は深津さん（左からふたり目）。積極的に質問する参加者たちの熱気が伝わってきます。

この日のキッズスペースは、絵本やボードゲーム、すごろくを準備。子どもサイズの掃除道具もセットして、準備万端。（写真提供・まちのおやこテーブル）



子どもも場づくりの仲間。字が書ける子は、手書きのサイン（看板）を用意しました。